

青森・高間（一）遺跡

所在地 青森市大字石江字高間

2 1 調査期間 二〇〇四年度調査 二〇〇四年（平16）六月一

3 発掘機関 青森市教育委員会

4 調査担当者 木村淳一・相馬俊也

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 縄文時代、弥生時代、平安時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（油川・青森西部）

高間（一）遺跡は、青森市西部の国道七号とJR新青森駅の間の標高九m前後の丘陵地に立地する。東北新幹線新青森駅周辺の土地区画整理事業に伴い、二〇〇三年度から高間（一）・新城平岡（四）・新田（一）の三遺跡を対象に調査を実施した。今回紹介する高間（一）遺跡は、二〇〇三年度から

SK一一六は平面が不整円形を呈し、長径一二二cm短径一八cmを測る素掘りの井戸である。湧水が激しく壁崩落の危険があり、途中で精査を終了したため、深さは二三〇cmまでしか確認できなかつた。出土遺物はほとんどが木製品で、確認面から深さ一四〇cm以下の、一三cm大の炭化材を多量に含む灰黃褐色土から出土した。木簡は二点が確認された。その他には箸状、杵状、臼状の木製品が出

土した。

二力年で約八五〇〇m²を調査した。その結果、縄文時代の落し穴状遺構、平安時代の竪穴住居・溝・円形周溝・井戸・掘立柱建物、中世の井戸などの遺構を検出した。遺物は縄文土器・石器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器や、中世の陶磁器・木製品などが出土した。木簡は、丘陵先端付近で検出した井戸SK九七と、南東側の平坦面で検出した井戸SK一一六から出土した。ともに中世の遺構と考えられる。SK九七は平面が不整円形を呈し、長径一三〇cm短径一二二cm、深さ二九七cmを測る素掘りの井戸である。出土遺物は箸状や板状の木製品、漆器椀・皿、まな板などほとんどが木製品で、確認面から九五cmの深さにある植物遺存体を多量に含む厚さ一六五cmの黒色土と、その下の厚さ一〇cmほどの稲殻の層、さらに下に堆積した植物遺存体を多量に含む黒色土から出土した。木簡は五点が確認された。上層では土師器杯・甕、須恵器甕・壺など古代の遺物も混在して出土している。

SK一一六は平面が不整円形を呈し、長径一二二cm短径一八cmを測る素掘りの井戸である。湧水が激しく壁崩落の危険があり、途中で精査を終了したため、深さは二三〇cmまでしか確認できなかつた。出土遺物はほとんどが木製品で、確認面から深さ一四〇cm以下の、一三cm大の炭化材を多量に含む灰黃褐色土から出土した。木簡は二点が確認された。その他には箸状、杵状、臼状の木製品が出

8 木簡の釈文・内容

井戸の木九七

- (1) □
 (2) □ □
 (3) □ □ □
 (4) □
 (5) □ □
- (236)×45×10.5 065
 (212.5)×12×8.7 019

(183)×102.5×8 081

(224.5)×15×4 081

239×10.5×5 051

井戸の木一六

- (6) □ □ □
 (7) □ □ □ □
- (86.5)×17×1.5 019



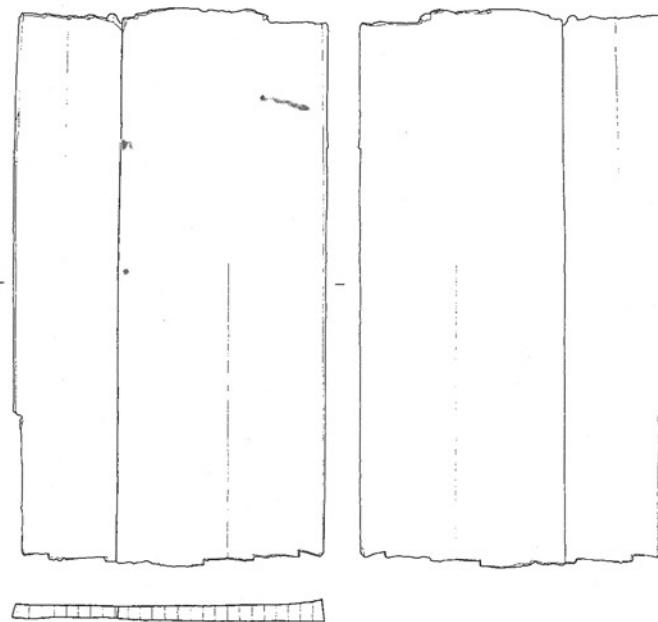
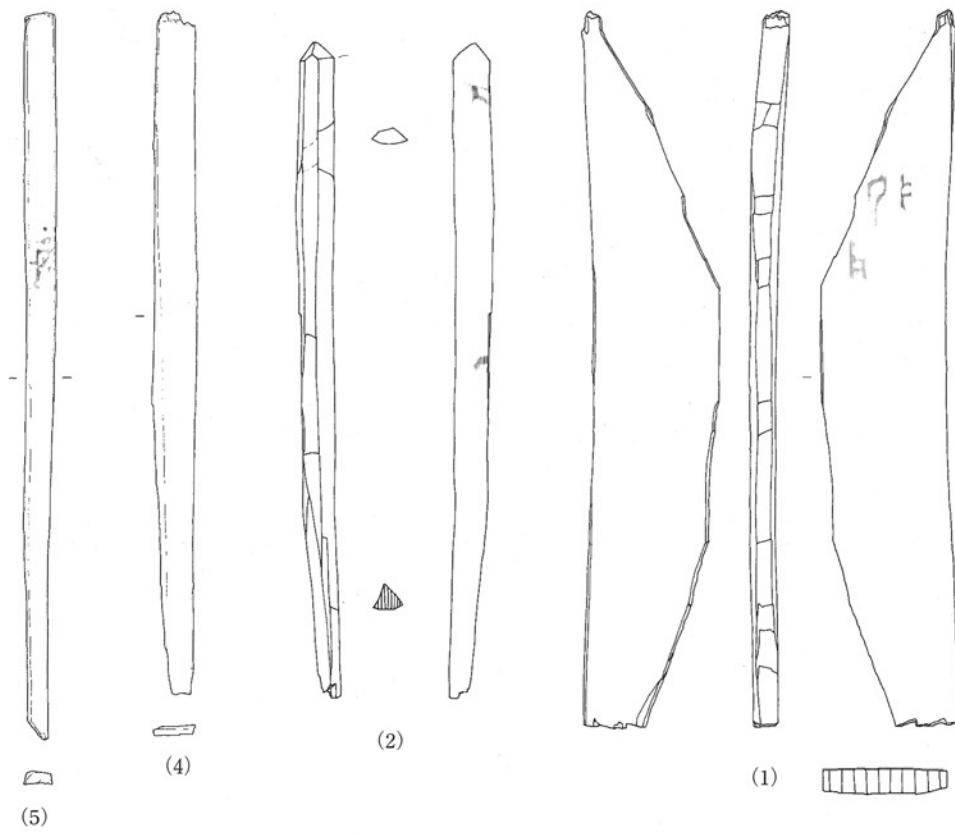
(7)

(木村淳一・相馬俊也)

るが、先端を欠損している。(2)は上端を圭頭状に成形し、下端を欠損している。墨痕は表面の上端部と中央部に確認される。裏面は山形に削られており、断面は三角形を呈する。(3)は板状で、上下両端を欠損している。墨痕は赤外線観察時には両面に確認されたが、片面の墨は抜けてしまい、一面のみが残存している。(4)は上端を欠損しており、下端は削いだように薄い作りで、表面に反った形状である。(5)は上端を平坦に削り、下端左側面を斜めに削っている。墨痕は中央より上の部分に一文字または二文字分確認される。(6)は薄い板状で上部を欠損している。(7)は下端の右側が弧状に削られている。なお、釈読にあたっては、学習院大学の鐘江宏之氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏の教示を得た。

2004年出土の木簡

いずれも墨痕の残存状況が悪く、赤外線テレビカメラ装置による確認後、墨痕が消えてしまい、図化に至らなかつたものもある。
 (1)は左辺の上下両端を斜めに削っている。上端部はつまみ状である。



(3)